

「おや、やめてしまうのか。残念だな。おまえさん、なかなかうまいのに！」
突然のしわがれ声に、ザキはおどろいて立ち上がった。

ふりむくと、太い幹の向こうに、ものすごく年をとった老人が立っている。髪の毛は突っ立ち、ひげは伸びほうだい。だが、ザキを見つめる目は、明るく、するどく、老人とは思えぬ力があつた。

おどろいたことに、老人も横笛を手にしている。からみあつた金色の木の葉模様がほどこされたたいへん美しいもので、ザキは目をそらすことができなかつた。

そんなザキの心を読んだように、老人がいった。

「そうじゃ。この笛はよいものじゃ。だが、よい奏者が吹いてこそ、よい楽器。おまえはまだ練習が必要だ。息の吹きこみかたも、たましいの吹きこみかたも、もつともつと練習せねばならんな。おまえの音には、まだたましいが足りん。何が起ころうとも心をみだされない訓練が、必要じゃな」

いいおわるなり、老人は、切り株の広がる麦畑の中を、まっすぐカーン氏の邸宅の方へ歩き去つた。

ザキは、ポカンと口をあけたまま、その後ろすがたを見送つた。

「ザキ！ ザキ！」

いつから呼んでいたんだろう？

きつと、大急ぎでザキをさがしてくるよういわれたにちがいない。ナズイーラが、麦畑の向こうから、いらだつた声でさけんでいた。

